



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サブカルサブリ第24回 : 「ゆるキャラ」の功績再考 : 「ゆるさ」と「幼稚さ」の持つプラスの意味
Author(s)	山村, 高淑
Description	埼玉新聞2012年11月23日版、特集「サイタマニア」、p.2
Citation	埼玉新聞
Issue Date	2012-11-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50781
Type	article
File Information	20121123Saitamania subcul suppl No.24.pdf



山村高淑の

サブカル サブリ

アニメや漫画の舞台地が多い
サブカル王国・埼玉。その魅力
を「アニメツーリズム」の専門家、
山村高淑氏が紹介する。



今からちょうど10年前の2002年11月23日、「第1回みうらじゅんのゆるキャラショー」が後楽園ゆうえんちスカイシアターで開催されました。当時は「ゆるキャラ」という言葉自体、一般には耳にすることがまれな、ある種サブカル的な響きを持つ語でした。それがこの10年間で日本全国津々浦々で次々と「ゆるキャラ」が生まれ、今や「ゆるキャラ」はほぼ国民誰にでも通じる一般的な語となったのです。まさに今年には「ゆるキャラ」にとって感慨深い10周年なのです。

敵をつくらない郷土愛の表し方

さて、この10年間の「ゆるキャラ」の最大の功績とは何でしょう。それは「敵をつくらない郷土愛の表し方」を示し、他者と競争するのではなく、仲良く協力していく道筋を示してくれたことだと思います。実はこれまで郷土愛は、往々にして非常に偏った方法で教育されてきました。つまり、他者よりも自分の地域の方が優れているんだ、強いんだ、というエリート思想、選民思想的な優越感を住民に抱かせ、結果として他者を劣った者、弱者として差別するという風潮を生んできたわけです。そこでは、他者とはライバルであり、競争によって完膚なきまでに打ち負かすべき相手でした。しかし、「ゆるキャラ」における

「ゆるキャラ」の功績再考

～「ゆるさ」と「幼稚さ」の持つプラスの意味～

郷土愛の表現方法は、そうした競争社会的発想とは全く異なります。そもそも「ゆるさ」というコンセプト自体がある種の自虐性を内包しており、道化よろしく、自らの地域の特徴を面白おかしくキャラクタ化することに重点が置かれるわけです。顕著な例は、ご当地の戦国武将をモチーフにした「ゆるキャラ」です。徹底して英雄的な強さのイメージはそぎ落とされ、こつけないデザインにデフォルメされています。

まさに「ゆるキャラ」に我々が抱く親近感と安心感は、この良い意味での、自虐的ゆるさ・脱力感(勝負を気にしない、やる気の無さ)に由来するわけです。ゆるキャラの皆さんを良く見てみてください。すつとほけた目、うすら笑いをした口のキャラがほとんどです(メロン熊は例外ですが)。そこから「エリート臭」や「強い地域」の喧伝はほとんど全くと言ってよいほど感じられないのです。

勝ち負けではない「ゆるさの美学」

だからこそ、相手は敵や競争相手ではなく、協力すべき、愛すべき仲間なのです。「ゆるキャラさみ」とが、オリンピックや○○全国大会のような、国や地域の威信をかけたピリピリした勝負の場ではなく、全国からキャラが集まって、東北の

被災地を応援しよう、地域と地域が協力して助け合おう、という場になることができるのも、こうした理由によるのです。つまり、地域の違いは、決して勝ち負けや優劣で測るものではなく、単なる個性の違いとして笑顔で認め合うという「ゆるさの美学」が根底にあるからなのです。

バブル経済崩壊後、現在に至るまで、失われた20年といわれるように、日本経済は低迷を続けています。しかしこの20年の間に、これまでの画一的価値観に基づく競争社会とは異なり、様々な生き方を認め、助け合い、共生を目指すという動きが、様々な分野で育っています。「ゆるキャラ」が日本各地で増殖しているのもそうした社会の流れに位置付けて考えてみると意義深いものがあると思うのです。

「幼稚化」が世界を救う

「第1回みうらじゅんのゆるキャラショー」から10年。「ゆるキャラ」は自治体にとどまらず、自衛隊から民間企業、商店街、学校に至るまで、様々な主体に広まり続けています。これを「国民の幼稚化」と一笑に付すことは簡単です。しかし「幼稚化」を「子どものころのように純粋な心を取り戻すこと」と置き換えたらどうでしょうか？

蹴落とさなければならぬ」「他者や後世にツケを回してでも、自分の経済成長を追求すべきだ」云々：そんな「大人らしさ」「社会人らしさ」を追求した揚句、はじけたバブルです。争いや戦争を生む屁理屈も「大人の論理」です。だったら、本来の人間らしい、平和を愛する子どもを取り戻すことは決して悪いことではないはずです。

こうして地域のイメージを、全国各地が徹底して平和的に「ゆるく」発信している国は、世界中を見渡しても日本くらいしか存在しません。平和だからそうなるのか、ゆるさが平和を生むのか、その議論は別の機会に譲るとしても、こうした状況は文明史的に見ても極めて稀有な、素晴らしいものだと思うのです。世界に誇る文化だと言っても過言ではありません。

確かに「ゆるキャラさみ」とは政治の世界のサミットのパロディかも知れませんが。しかし地域エゴのぶつかり合いである政治の世界のサミットこそ、「ゆるキャラさみ」との「ゆるさ」から共生の在り方を学ばべきだと思うのです。というわけで、日本中をこんなにゆるくして頂き、他者に寛容な風潮を育んでくださった関係者の皆様に心から敬意を表しますとともに、「ゆるキャラさみ」とin羽生の大成功を祈念申し上げる次第です。